



ここに来れば君に
会えると聞いたから。

陽香

誕生日に彼女から腕時計を貰った。「時間を巻き戻したり早送りしたりできる時計だよ。」帰宅した僕は早速それを腕につけて、3時間ほど針を巻き戻した。彼女が小さな包みをそっと僕に差し出した。「時間を巻き戻したり早送りしたりできる時計だよ。」そうして時計は二つになった。

彼女と僕はそれ以来、あらゆる場面でデートをする。昨日は学生時代の彼女と、20年前の世界でアイスクリームを食べた。ある日、僕は街を歩く彼女を見た。彼女は赤ん坊を抱えていた。僕は突然恐怖を覚え、時計の針を見た。僕には彼女と結婚した記憶がなかった。

小さな赤ん坊は僕を見て激しく泣いた。「ねえ、君はいつの君だい」「あなたこそ、いつのあなた？」僕はほんの数日前に、時計を貰ったばかりなのに。僕らが付き合い始めて、最初の誕生日だった。何てことをしてしまったのかと、僕は慌てて時計の針を巻き戻した。

以上が僕の、来世の記憶です。皆さんも、時計のご利用は計画的に。

メシリトリ

「...わかったよイタリアンでいいよ。僕は蕎麦が食べたかったけど」

「どうして貴方っていつもそうなの？そういう言い方やめてってお願いしたじゃない」

「いやあ、癖かな。ごめんごめん.....あ」

「よっし！お前の奢りー」

「くそーやられた！」

「メシリトリはやっぱり女役が有利だなー」

願わくは

ベランダから流星群を見ていたら妹が聞いた。

「あれなあに」

「星が降っているんだよ」

妹は顔を顰め、ちょっと困ったように言った。

「ぶつかったら痛い？」

「そうだねえ、怪我するかもしれないね」

妹は小さな両手を合わせて、懸命に祈った。

「皆が怪我しませんように」

まるいみどりの

「終わりのあるものが嫌いなんだ」

「だからこれに？」

「そうさ。いつまでも繰り返すリズム、何度でも巡る景色。終わりは始まりであり、途切れることなく次へと向かう。永遠に終わることのない、完璧な機関！」

『えー...次は一終点一、大崎一大崎一です』

「.....残念だったね」

彼の行く末

絶対に最後まで諦めないと出発した時誓ったのに、僕の旅路は直ぐに行き詰まった。
目前に立ちはだかる壁は余りに高く、とても越えられそうにない。
とぼとぼと背中を丸めて来た道に戻る僕に、見知らぬ誰かが話し掛けた。

「右手を壁につけると良いですよ」

夜の終わりに

群青を通り過ぎ黒に塗り潰されていく天井。

疎らに点る明かりは余りにも頼りなくて、僕の目にはぼやけて映った。

音楽は古い投影機がたてる軋んだ音だけ。今日でここは閉館する。最後の投影に観客は一人。

やがて明るくなった部屋で星好きの男が泣きながら礼を言った。

それは僕だった。

役にも先にも立たないものは

私は何とやることをしてしまったのだろう。悔やんでも嘆いても、全ては余りに遅すぎた。20分前に戻れるのなら、何もかも投げ打ってもいい。何故もっと早く携帯を見なかったんだ...！

『本文：誕生日おめでとう！ケーキ買ってあるよ。ホールじゃなくてごめんね。帰ったら食べよう』

私は痛いのが大嫌いだ。

歯医者なんて絶対行かないし、筆筒に小指をぶついたりしないようにいつも気をつけている。
爪きりも怖いからやすりを使うし、静電気除去には余念がない。

そんな私がたった一つだけ許せた痛みがある。

初めてのキス、緊張した君の歯が唇に当たった。私は笑った。

想像力を織り成して

クラスメイトの女の子はいつも綺麗な落ち葉を集めていた。

赤や黄色の一枚をためつすがめつしてから、そっと鞆にしまう。

何を作るのだろう。落ち葉で絵を描くのだろうか。巨大な秋色のタペストリーを想像する。

「ねえ、それどうするの」

「うつくしいものを作るの」

「何を」

「腐葉土！」

価値のあるもの

「お誕生日おめでとう。プレゼント何がいい？」

「もっかい言って」

「お誕生日おめでとう、プレゼント...」

「ありがとう！本当にありがとう！」

「ん？」

「いつか誰かに、それを言って貰うのが夢だったんだ！」

「.....ん。おめでとう」

訓戒

銃口が緩やかに上がり、軍靴が土を蹴る。

そんな景色はないけれど、僕等がこれから向かうのは紛れも無い戦場。

武器はこの指と声と、少し不得手な愛想笑い。

さあ今日を始めよう。日暮の凱旋に思いを馳せて。

新しい通信手段が開発された。イトデンワと言うもので、どうやら元は古代文明の遺産らしい。何より驚いたのは、隣室との間に張る細い糸...壁に穴を開けるといことなのだ！初めて他人の「声」を聞いて私は興奮した。どんな人か見てみたい！ああこの糸が邪魔だ、切ってしまえ！

ぱちん

本棚から厚めの一冊を引き抜くと、その場でページを開く。
私の視線は紙面ではなく、上目遣いに空いた本棚の向こうを見ている。
カウンターに座る君、柔らかな笑顔、穏やかな応対。ふと手元の本を見下ろした。

「平成12年法律第81号」

.....そんなんじゃない。慥然と本を閉じた。

ひとりのよるに

暴力的な気持ちの夜は、何も言葉にしないで眠る。

身体をできるだけ小さく丸め、いないいないと唱えて眠る。

不作法な刺が、誰かを引っ掛けないように。

恥知らずな唇が、貴方を苦しめないように。

無音文字列請求

最上級の愛の言葉だとか、最高級の店の予約だとか、そんなものは要らないから空いた右手を握って欲しい。

モトカレ

太陽が苦手な恋人は、月明かりなら大丈夫だと言う。

理由を聞けば「あれは反射した光だから」とのこと。

私は早速、壁を全面鏡張りに工事して、翌朝勢い良くカーテンを開けた。

「ほら！朝日が気持ち良いよ！」

振り向くと恋人の姿はなく、灰だけが落ちていた。

タソカレ

満月が苦手な恋人は、三日月なら大丈夫だと言う。

理由を聞けば「欠けていれば問題ない」とのこと。

私は早速、窓と言う窓に黒い水玉を描き込み、満月の深夜勢い良くカーテンを開けた。

「ほら！素敵な月夜だ、……」

振り向こうとした彼女の影が欠けた。

【満月から新月までの注意】

今宵の夜は、ゆうべの夜よりほんの少しばかり多く月が溶け込んでおります。ご服用時にはくれぐれもご注意下さいませ。月の摂り過ぎによる副作用を、ゆめゆめお忘れなきよう…。

センキョウ

守りたいものがあって、それで始めた戦いだっただのに。

守りたいものを失ってまだ続ける理由は何？

復讐を旗標に掲げた途端、勝てなくなったのは何故？

答えは私の心が知っていた。硝煙の匂いがしない空気では、もう生きられないのだ。

度し難い愚か者の我々。

犬の気持ち

君の踵にキスをした。頭に乗った土踏まずを甘く噛んだ。
君はクスクス笑いながら、僕の耳朶を優しく撫でてくれる。
その指を何度も舐めて、背中を辿る君の掌を待つ。
裏切るように首筋から顎下へと動く指先。
やわやわと胸元を辿る手に促され、僕は尻尾を振っている。

靴、家の小人

私の仕事は、人間の家の玄関先に住み着いて、毎日「本当にその靴でいいの？」と声を掛けることです。

化石年数

石を拾った。綺麗な色と形が気に入ったのでフェルトでケースを作り、毎日持ち歩いた。悲しい時にはそっと撫で、悔しい時にはぎゅっと握り締め、私は石に話し掛けた。一年後、ふとした弾みで落とした石の断面に小さな化石を発見した。ずっと私の話を聞いてくれたのは君だったのか！

ちょっと眠っている間に奴は何も言わず旅立っていた。
一ヶ月も寝食を共にしたってのに、全く薄情な奴だ。
今すぐ追い掛けて文句を言って...そして奴と旅に出るのもいい。
ふと、誰かに肩を叩かれた。
振り向くと我が物顔の八月がそこに居た。
嗚呼、さよならだ、七月。僕は逃げられない。

したり雀

「生まれ変わったら木になりたい」

「じゃあ私はあなたから芽吹く葉になりたい」

「嫌だよ」

「どうして」

「おしゃべりな君があんなに沢山、それもすぐ傍に居たら、ちっとも気が休まらないじゃないか」

...と、雀が二羽つつきあっていた。

落し物は誰の物

僕が拾った宝物は、金と緑のまあるいビー玉です。夜に透かすときらきら光るのが、猫の目に似てうつくしいのです。

入道飴

小鬼A「何作ってるの」

小鬼B「ほら、そろそろ夏祭りだから」

小鬼A「うん」

小鬼B「わたあめ練習中」

小鬼A「ソレ食べられないじゃん。雷も鳴るし雨も降るし...」

小鬼B「だって他にそれっぽいものないし」

小鬼A「雨降ったら夏祭りは中止だよ」

小鬼B「.....!!」

「君の身体は原子でできていて、キーボードや机や椅子も原子でできているのだから、多分触れ合っている部分では隙間に互いが入り込んで渾然一体となっていて、どっちがどっちだかわからなくなってる。という事は僕は君に成り得るよね？」...って、つり革が尋ねた。

夏艶墨

かき氷のメロン・シロップに解け出した夏を、プラスチックのスプーンで掬って少女達が唇に含む。

こくりと白い喉が鳴る度に、冷まされた内腑は熱を孕む。

SEMIの仲間

土に潜る前に、彼等も約束するのだろうか。

「目覚めたらあの木で会おう、きっと君より立派になってみせるよ！」

五月蠅い程の鳴き声に打たれて、大学時代を思い出す。

友人と語り合った言葉。

「いつか学会で会おう、きっと君より立派な研究者になってみせるよ！」

携帯電話のディスプレイを定規で計ってみて下さい。

縦横それぞれ何cmでしたか？

この小さな四角越しに、今もあなたは世界と繋がっています。

気持ち悪いですか？面白いですか？怖くなりましたか？安心しましたか？

私もその中の一人なのですが。

夜を走る

夜を走る列車の窓は、ひとつひとつが星座盤になっていますから、たまには手元から顔を上げて、好きな模様をあの硝子に描いてみてはどうですか。

リネン

纏わり付く夏が鬱陶しくて、シャツのボタンを一つ外す。

途端に君の指がそれを咎める。

ささやかな抵抗に衿元までボタンを留めれば、君が喜ぶから堪らない。

暑さと君と、二対一じゃあ勝ち目がないよ。

私の希

私の名前は「稀人」と言う。

子供の頃は「稀にアレルギーを起こす」食品で死に掛けたり、「稀に失敗する」受験で痛い目を見たり、散々な日々を過ごしていた。

今、私の目標は「稀に成功する」チャンスを物にして、成功した人物が「稀に選ぶ」という、安定した静かな日々を送る事だ。

窓から覗き込まれる気配にはっとしてカーテンを開けると、アサヒが真っ直ぐに見詰めて来た。

私は勢い良くカーテンを閉め、怯えながら毛布に潜り込む。

伸ばした手が時計を掴み、懸命に針を巻き戻す。

けれどヨルは戻って来ない。ヨルはもうずっと先に行っていた。

偽りなき看板

『小学生の家庭教師』を始めた。

一生懸命やっているのだが、私はいつもいつも文句を言われてばかりだ。

「こんな問題も分からないの？いい年した大人のくせに。しっかりしてよね、社会人」
小さな先生にせっつかれ、私は今日も課題に向かう。やるべきことはまだまだ山ほどあるのだ。

「昨日の記憶、どうする？一昨日の横に置く？去年の同じ日と並べる？月曜日で揃えると、ちょっと退屈なパターンになるなあ。何かいいアイデアない？」

「悪趣味なパッチワークを廃棄して、僕とドライブに行く」

「いいね。ストライプ、丁度欲しかったんだ。スカイラインで頼むよ」

梅雨の終わりにしまい込んだフラスコを持って外へ走っていく。

通りの向こうからは麦藁帽子を逆さに掲げ、はにかみ笑いの彼が来る。

「これしかなかったんだ！僕の部屋ときたら、すっかり夏にやられてて」

「いいよ、私の長靴を貸したげる」

裸足を水溜まりに浸せるまで、あと数時間。

後日

電車の窓から君の家の屋根が見える。傾斜する緑の中央に窓が一つ。
今朝は白いカーテンが揺らいでいないから、きっと君は遅刻してくるね。
誰もいない教室をイメージ。瞼の後ろでシミュレート。
今日こそ君に伝えられるように、唇の内側でおはようごめんねを繰り返す。

子豚のポリーシ

私が何より恐れているのはレトルト食品になってしまうこと。
切り刻まれた挙げ句、何日間も暗く狭いパウチに閉じ込められるのを想像しただけで目眩がする。

「馬鹿なポリー。人間なんて世界にたった3人よ。何を恐がるの」
仲間の声を無視して今日も祈る。どうか美味しく食べて下さい。

半月皿

「メアリーのバースデー・ケーキを乗せるから、大きくて可愛いお皿を取ってきて」とママは僕に言った。

カーテンの向こうに横たわる夜空を見上げて、僕は途方に暮れている。

妹が大好きなあの黄色いお皿を、僕が知らない間に誰かが割っちゃったみたい。

ケーキを何に乗せようかしらん。

後ろを歩く

「どう？今回は自信あるんだけど」

「痛みがもう少し強い方がいいな。喉越しが滑らか過ぎる」

「そうすると苦いって文句を言う癖に」

「馬鹿、本当に透明な痛みってのは、苦くないもんだよ」

「そんなの見たことない」

「...見なくたっていいよ、お前は」

澄棺

彼は長い長い年月を掛け、本当にうつくしいものだけを拾い集めた。

誰が見ても無駄な事だったけれど、ただ黙々とそれ続けていた。

やがて箱一面にうつくしさが敷き詰められると、彼はそこにそっと横たわった。

蓋は要らないのかと問うと、うつくしい空があると答えた。

ゲジゲジ、或いはトンヌラ

この国では名前が人を選ぶ。

生まれた時に268の名前の中から一つがその子に与えられるのだ。

しかし少年には名前がなかった。総ての名前が彼を拒んだためだ。

だが少年は名前がないことを誇りに思った。

まだ誰も知らない、自分だけの名前が何処かにある筈だと。

⇒彼に名前をつける

深夜の胡散臭さ

「花畑に連れて行って！色とりどりの花があるところがいい。できる限りたくさんの種類で花束を作りたいから。だけど花を切ってしまったら、花は枯れてしまうのね...」

「そんな時にはこれ！高感度カメラ！！多種多様な花の色をくっきり保存できるよ！」

「わあ！すごーい！」

という通販

人は僕の掌に温かい石を乗せ、ぎゅっと両手でそれを包み込みながら、囁くような小さな声で告げた。

「いつかきっと、これをあの山へ届けておくれ。」

僕はしっかりと頷いて、その石をポケットにしまった。

暫くして老人が死に、僕は気付いた。

これは石ではない、人の骨だと。

参加者への注意

「ゲームは非常に単純です。誰でも参加できますから、貴方もいかがですか」

「とりあえずルールを教えてください」

「はい、先ずこの手紙を読んでください」

「なにになに...『この手紙をまだ受け取った事のない誰かに渡してください』...?」

「では、ご健闘を」

皆が一斉に目を逸らした。

「...ねえ、他のはないの」

「じゃあ『人が死ぬところを見たいとせがんだ王子の話』は？」

「他のは...？」

「うーん...『坂道を転げ落ちた先にあった深い穴の話』とか」

「何でそう終わり方が暗そうな話ばかりなの」

「だって君、これから眠りに落ちるんだろ」

「明るい眠りを提供して！」

取捨

ある朝出勤しようと家を出ると、ドアの前に白いマルが一つ描かれていた。

翌日、そのマルは二つに増えていた。

マルは日に日に増えて行く。

六日目、そのマルは左右に分かれた。

二つ並ぶマル。

駅に向かう方へ一歩を踏み出すと、反対方向のマルが消えた。

僕は今、何を失ったのだろうか？

秋来

雨音に誘われて窓を開けたら、少しだけ申し訳なさそうに秋が入ってきた。

暖かい布団を用意しながら、遠慮なくゆっくりして行って欲しいと告げると、途端に部屋がしいんと冷たくなった。

今夜はもう明かりを落として、電車の走る気配と雨に全部を預けてしまおう。

お布団

僕はある会社のファイルキャビネットに住んでいる。ここは数字が沢山あって落ち着くのだ。

しかし、最近仮眠室に導入されたという「おふとん」が気になってしかたない。

試しに仮眠室へ入ってみた。

ふむ、成る程、これは...なかなか.....。

「大変！仮眠室に理系眼鏡っ子の座敷童が！！」

私の趣味は「透明な四角」を集める事。

近頃は窓の収集に夢中になっている。

しかし一步間違えれば窃盗罪だ。

誰かに相談したいが、こんな趣味を持っているのは私だけだろうと『まどとり』で検索してみた。

『もしかして：間取り』

...何でもかんでも省略する昨今の風潮にはうんざりする！

10月前夜

全国お化け教会、本日の議題は『地味だけど効果的な悪戯』です。何か良いアイデアがある人は？

「はい！」

どうぞ。

「えーと、シャンプーを流している人の背後から、シャンプーをかけ続ける悪戯です。心理的かつ経済的ダメージを与える事ができます」

なるほど、なかなかいいですね。

囁り

オーブンの扉を開けて、出来立ての言葉達をつまみ上げる。
トングに挟まれた文字はまだ熱く光っていた。
私はそれを慎重に慎重に、小鳥の口許へ差し出す。
こうして出来上がったアーカイブ、さあ、冷めないうちに召し上がれ。

早すぎるエンドロール

『どう解釈してもハッピーエンドにしかない物語を書きたいが世の中に捻くれ者が多すぎる。何も書かなければバッドエンドにはなるまい!』と筆を折った友人がまた小説を書き始めた。『何も書かなければハッピーエンドにもならんと気付いた』とか。願わくは彼にハッピーエンドを。

彼の夢は世界中をかなしみで満ち溢れさせることだった。

「さあ、かなしみを始めよう」

かなしみを詰め込んだ箱を開けようとする手を私は止めた。

けれど彼は 蓋を開けてしまった。

かなしみが飛び散った箱の底には嘆きがあった。

かなしみより勝るものがあると知った彼の嘆きだった。

嘘の隠れ家

「今世紀最大の嘘吐きです」とその人は名乗ったので、多分きっと、とってもいい人なんだろう。

僕は彼を部屋に上げ、お茶を煎れ、ケーキを振舞った。

彼はニコニコとそれらを平らげ、ぱたりと机に突っ伏した。

さあ、研究開始だ。

今世紀最大の嘘は、彼の何処に隠れているのかしら。

混合

地上に原石を沢山落としたのに、誰もそれを磨こうとしない。

不思議に思って尋ねれば、人間達はこう答えた。

「磨かれた石の美しさより、まだ磨かれていない石の持つ可能性に私達は惹かれるのです」
明日からは原石と石を混ぜて地上へ降らせよう。神様は楽しげに箱の中身を混ぜた。

ツイッター

タイムラインに連なった、あれやこれやの言葉皿。
みたらし、きなこ、シナモン、ペッパー、飽きることないデザートタイム。
お供は紅茶か珈琲か、或いはミルクかアルコール？
制限時間はありませぬ。どうぞごゆるりお楽しみください。

...お目覚め時間には、くれぐれも気をつけて。

春想い

日本に来た。ここには四季があるらしい。

春夏秋冬とはどんなものだろう。

ワクワクと踏み入れた地は、どこもかしこも灰色で冷たい。

「すみません。春夏秋冬はどこですか」

「今は冬よ」

「春夏秋はどこにあるのですか」

「暫くすれば春になるわよ」

私は知った。

季節は移ろうものなのだ。

君の価値 僕の価値

ふかふかのブーツがほしいなあ、と君はテレビを見ながら呟いた。

僕は画面をじっと見て、その晩毛糸のカバーを編んだ。

長靴にカバーを被せて君に渡したら、君は困った顔をして、けれど笑って言ったんだ。

「あなたって本当、器用な不器用ね」

雨が降る前に、二人で出掛けることにした。

狩人見習

来年のバレンタインが最後のチャンス。

大好きな先輩は三月で卒業してしまう。

『絶対成功！秘密の魔法チョコレート』のページに付箋を貼って、私は武器を用意した。

小さな鋸と柔らかい布、血止めの薬草。

さあ、トナカイの角を採りに行こう！

予行練習をPSPで済ませ、準備は万端だ！

過不足余剰の甘い余地

都知事が僕らを「足りない」と言ったので、その足りない何かを探す旅に出た。

バスと電車を乗り継ぎ、歩いて歩いたその先で君を見つけた。

ああ、僕に足りないものは君がちゃんと持っていてくれたね。

ありがとう大好きな人。僕らは補い合うことができる。足りていたら解らないことだね。

彼の価値 彼女の価値

二人並んで電車で揺られながら、車窓を流れていく町並みを見ていた。

君が不意に「どの家が好き？」と尋ねる。

悩みつつ緑の屋根を指差したら、「ずいぶん尖った屋根だね、きみの心みたい」だなんて。

私は君と、あんな家に住みたいなって思ったのよ？

お城みたいなたんがり屋根の家。

夢見る夢を見る

夢を見る為の装置を開発した。

僕は何も夢見たことがない。

世界中のありとあらゆる夢をインプットして、僕はモニターの前に座る。

あれもこれも、きらきらと美しい憧ればかり。

溜息をついて席を立った。僕の夢はまだ見付からない。

拾い物

靴が落ちている。少し先にマフラー、手袋、コート。

周囲には誰もいない。

更に靴下が片方。1m先にもう片方。

拾わずに見遣った向こうには、くたびれたYシャツとスラックス。

ちゅん、と水音に呼ばれ角を曲がれば、ドアの向こうから「お帰り」の声。

「ただいま」とその声を拾った。

淡い寝物語

夜の枝に引っ掛かっていた冬をそっと外したら、白い白い尾を引いて真っ直ぐ空へと昇って行ったんだ。

明日の朝はきっと雪が降るだろうから、長靴を用意しておやすみ。

あんぱん

「それでお前、両手を揃えて突っ立ってた訳？」

「そう」

「殴られて当然だな」

「なんでだよ」

「彼女は『私の顔を食べて』って言ったんだろ？」

「ああ」

「俺なら直ぐにキスするね」

「えっ！だって顔を食べてって言ったらアレしかないだろ」

「何だよ」

「アンパン」

(* 1/14 ツイノベの日 お題「あんぱん」に投稿)

木村さんに会いに行こう

廊下の角で女生徒とぶつかった。

「どうしてくれるのよ！」

「ご、ごめん」

「ごめんじゃ済まないわ。今すぐ買ってきて。木村屋の白アンパン！大好物なんだから！」

「木村屋...？」

「知らないの!？」

頷いた僕の手を取って、彼女は走った。

それが二人の出会い。

(*1/14 ツイノベの日 お題「あんぱん」に投稿)

この自動販売機はなかなか商品が売れない。

百円を入れるとガリガリムシャムシャゴクン！と音がして、ボタンが光らないからだ。

僕はそれが彼なりのサービスであり、悪戯心だと知っているから、迷わずコーンポタージュのボタンを押す。

ガコン。

ココアが出てきた。

防曇オセロは黒い円

眼鏡を曇らせながら仮眠を取るマスクの女性。

曇る眼鏡を拭きつつ読書に勤しむ男性。

真ん中に中学生が座ると、少女のレンズはたちまち曇った。

目薬を点す姿を見ながら、心の中で呟く。

オセロ。

「あの超有名高級チョコレート店にいったの。時期が時期なもんだからすっごく混んでてね、そう...4時間は並んだわ！漸く手にしたチョコレートの箱を開けて、いざ一粒食べようとした瞬間よ！」

「落としちゃった？」

「違うわ、そんなんじゃない」

「横取りされた？」

「目が覚めたの...」

彼の所有者

彼はいつもハイネックばかり着ている。大体が真っ黒な薄地のハイネックだ。
どうして襟の高い服ばかり着るんですか、と問い掛けてみると、彼は静かに笑いながら答えた。

「ずっと、首を締めてもらっている気がして、安心するんだ。」

あの時の苦く甘い横顔を、私は忘れられないでいる。

欲しがりやの休日

もう10年も彼はチョコレートを貰っていないという。
今年も365分の1の日に、彼はチョコレートを貰わないかもしれない。
けれど案ずる事はないのだ。1年は、まだ364日もある。
何でもない日、万歳。

欲しがりやの平日

泉から現れた女神は尋ねた。

「クリスマスに貰うプレゼントと、誕生日に貰うプレゼントと、何でもない日に貰うプレゼント。お前が一番嬉しいのはどれ？」

「ぜんぶ！」

「即答ね」

貴人への祈り

途方に暮れた鬼が歩いていると、一軒の民家で戸の開く音がした。

勝手口の間隙から眠たげな少女の声。

「オニはーうちー、フクもーうちー」

鬼は戸口から差し入れた指先で少女の頭を優しく撫で、おやすみと囁いた。

願わくは、彼女に温かな寝床と柔らかな夢を。

鬼は初めて祈りを捧げた。

夜行

「冷えた雨夜に列車は軋む。枕木濡らして車輪が笑う。明かりのない道、星のない空、袖口覗く黒い猫。

どなた様も、御忘れ物のありませんよう。お気をつけてお帰り下さい。」

「さようなら」

「はい、さようなら」

香る光

先生はしづかに頷くと、ぱたん、と教卓の天板をお閉めになりました。

わたくしはその下に秘められた、甘い香りの小包の事を、いつまでもいつまでも考えておったのです。

別珍を敷き詰めた中に並ぶ宝石は、それはそれはおつくしい、小さな夜の欠片でありました。

夢入り切符

「僕らは何処にでも行ける0次元の存在」

「夜を越えて朝を越えて」

「君の元へ向かいます」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

「くれぐれも途中で目を覚まさないよう」

「お気をつけて」

「ではごきげんよう」

ぴかぴかに磨かれた革靴の踵が随分擦り減っているのを見て、ああ、この人は沢山歩いて来たのだなあと思った。

何とか労いたくて丁寧に煎れたほうじ茶に、あつたまりますね、と柔らかく笑う声。

隙のないスーツ姿や穏やかな物腰より、あの踵が、擦り減った踵が、うつくしく、尊かった。

優しい嘘の裁き

この国では優しい嘘が推奨されている。だが優しくない嘘を吐いた者は即死刑だ。

「彼の罪を隠そうと...」

「いいえ、嘘をついたのは僕です。彼女を守りたかったのです」

「それは違う。最初に嘘をついたのは俺だ！姉さんのために...」

「彼らの嘘を見破った私が悪いの」

さあ、有罪は誰か？

ネオンより

皆さんあまりご存知ないようですが、僕らは毎日、細長い管の中から皆さんの暮らしを観察しています。

夜には体を光らせて、良く見えるように工夫もしています。

さて、観察の結果ですが、どうもこの星の人々は飲んだくれと色狂いばかりのようです。

そろそろお暇します。 ネオンより

我妻

玄関タイルを黒にしたの、貴方は気付いてないでしょう。

行ってくる、と踏み出した貴方の、眩しさにしかめた顔が見られずに、私は少し淋しくなりました。

それでもどうか貴方の眼が、健やかな朝を迎えられますように。

熱を吸ったタイルに水を撒きながら、ただいまを待ち侘びて居ます。

種蒔き

彼は出会う全ての人にいつも決まってこう尋ねた。

「花に生まれ変わるなら、何になりたい？」

彼の手帳にはびっしりと、誰かの名前と花の名が連なっていた。

端には二重線で消された名前がぽつぽつと並ぶ。

「もう済んだんだ。」

参列帰りの白手袋が、また一つ名前を消していた。

なりそこねの釦泥棒

鈍色の釦が欲しかっただけなのだ。彼のすっとした首筋の下、襟元を留めるあの丸い釦が。私が欲したのは曇天を塗り固めきつくきつく握り締めたあの鼠色の固形であって、このような赤黒い液体ではなかったのだ。

涙声が幾度も繰り返し、彼は級友の亡骸に縋る。皐月の雨の夜だった。

風音彩朝

晴れ渡る皐月の空を飛んで行く一枚の白。

加速する自転車が風を切り、少女は懸命にそれを追い掛ける。

伸ばした手は後少しで届かず、何度も空を掴んだ。

やがて電線の一本が、無慈悲に白を掬め捕る。

途方に暮れる彼女を見下ろし、やあ、とカラスが鳴いた。

片恋の自由

電車でいつも見かける彼女が、今朝は私と同じ鞆を持っていた。

雑誌の付録で手に入れた、何の変哲もないお弁当入れ。

今朝まではただの袋だったそれが、途端に特別な物になる。

帰りに手芸屋に寄って、素敵なアレンジをしよう。

彼女は気付いてくれるかしら。

カウンタ進言

一万五百二十三、何の数字か解りますか？

君が通学中に擦れ違う電信柱の数です。

いやいや一日じゃないですよ。入学してから今までです。

意外と多いでしょう？

だけどね、君が擦れ違った人間はもっとずっと多い。知っていましたか？

君は君が思うより、世界に無関心だ。よくご覧なさい。

焦がれる七枚

笹に飾る短冊を用意した。色は7色、願い事も7つ書ける。

1枚は自分のために、1枚は家族のために、1枚は世界のために使った。

後4枚を何に使おうか悩んで、君に電話が通じますようにと書いた。

残り3枚になったところで、自分の願い事が2つになってしまったと気づき、苦笑い。

書くことをやめてしまったの？と耳元で囁く声がある。

もう一度紡がないの？と指先に糸を絡ませる。

ペンが折れたなら爪にインクを、紙が切れたならその切れ端に！

さあ物語を！と強請る眼差しは、いつだって痕跡を拾い集めるばかり。

私はじっと卵を温めて、孵す支度を続けている。

白いシャツの向こうに

夏空見上げて溜息をつく。入道雲がふうっと揺らぐ。君は静かに瞬きをした。

夕立の気配に睫毛が重い、水滴が落ちてしまいそう、と虚勢混じりに苦笑い。

雨粒が早く落ちて来ることを祈るように、二人で空を見上げた。滲んだ雲はまだ白かった。

夕刻、夏

ひやりと冷たいものが肘に触れ、瞬時に眠気が吹き飛んだ。

うつらうつらと心地好い一時から覚めて見れば、膝頭に乗った細い腕。

頼りなく伸びたその白さにはっとする。

横目に伺う先、肩口には仄かに潮の匂いをまとう黒髪。

僕に寄り掛かり眠る少女は、夏休みの倦怠を身に纏っていた。

愛蛇

足首にカナヘビが住み着いた。私の踝を枕に眠る。

七分丈のパンツを履き、ヒールの高いサンダルを選ぶとカナヘビは喜んだ。

爪は紅く光る金色。歩く度、鱗がしゃらしゃらと鳴る。

今朝も私の足首に、熱い視線が絡み付く。

流れる星の往く末に

真っ白な猫を追いかけて辿り着いた先は夜の広場。

社交ダンスの名残を鳴らすオルゴールと、月明かりのランプが彩る夏の集会。

髭を震わせて彼等が見上げる流星に、私も何を祈ろうか。

足元で小さく響いた声は確かに、かつぶし、いっぱい、と囁いたような気がした。

*2011年8月14日（ツイノベデイ）に寄せて

君の執事、或いは家政婦、若しくは

僅かに肌寒い朝、コンビニのホットドリンクコーナーがいつになく賑わっている。

温かいカフェオレを所望する君に、あと10分の有余を貰ってキッチンへ。

缶コーヒーより愛情分だけ美味しいはずのマグカップ。

お供にビターチョコレートを一欠け。まんまる満月ビスケットもいかが？

外出日和

サンドイッチを沢山作っておでかけしたいの、と君が言った。

二人で車に乗り込み、パン屋と八百屋と果物屋へ。

ドレッシングと生クリームは街角のカフェで、チョコレートは川岸のダリアのお店に。

そうして仕上げのアイスクリーム・ショップで君が言った。

お出かけは来週にしましょ！

とうめいな万年筆を頼む、という依頼が来た。

万年筆をこさえて早30年になるが、こんな依頼ははじめてだ。

さてとうめいな万年筆とはどんなものか。

色のないインクにスケルトンのボディ、触れることさえ叶わぬ透明。

私は箱にそれを詰め、彼に送った。

氏よ、とうめいで何を書く？

@星新一さん生誕85周年記念祭（主催 : laybacksさん）

エヌ氏の依頼品 発送

ノックの音がした、郵便屋に違いない。
いそいそ印鑑を手に出れば、長細い箱を渡される。
あまりに軽い箱の中、見れば紙切れの走り書き。

<オ代ハ結構、良イ 創作ヲ。カシコ。>

中身はただのそれきり。
開いた箱に指を差し入れ、恭しくペンを摘み出す仕種。
さて裸の作家は何を書こう。

@星新一さん生誕85周年記念祭（主催 : laybacksさん）

夜半来訪

半月の晩、窓辺に訪れた影は自らを夢見鳥と名乗った。長らく放浪中らしい。

これまでの数多の鳥籠はどれも居心地が良くなかった、私に相応しい最高の鳥籠を探している、と聞いてもいないのに語り出す。

ならばこの鳥籠にきなさい、と私は [#twnovel](#) の鳥籠を差し出した。

バイバイ・マタネ

九月の列車に君と二人、揺られて過ごす午後三時。

もう夏も終わるなあと呟くと、君は立ち上がりカーテンを開けた。

眩しい日差しが床に跳ねる中、真っ黒い蟹が歩き出す。

君は交差した両手を動かしながら、サヨナラ、来年マタネ、と囁いて笑った。

車窓でコスモスが揺れていた。

彼女の理由

幼い頃に読んだ漫画の影響で、宇宙海賊になろうと決意した。

英語の勉強から始め、自然科学系の博士号を取り、選抜試験も通って宇宙飛行士になった。

しかし、いざ宇宙に出てみて気がついた。海賊になろうにも、他の船が殆どない。

私は夢を諦めて、ただの市民に戻ることにした。

帰らない一人

新聞紙から文字達が飛び出して、あちこちの靴に飛び乗った。
私の爪先で跳ねる文字に目を凝らすと、それは「帰」の文字だった。
ごめんね、あと半日は帰れないんだよ、と語りかける。
文字は知らんぷりで跳ね続け、気が付くと隣の靴に移っていた。
私の靴には「頑」の字が乗っていた。

タチツテトテチテタ

私の名前はロゼット。5人姉妹の末っ子なの。

父の仕事は石切職人で、今日も大理石を切り出しに行ってるわ。

え？姉を紹介して欲しい？さては貴方、[#twrvday](#)のネタが欲しいんでしょう。

お生憎様、一番上の姉は、ロゼッタなんて名前じゃないわよ！

(2011/9/14 ツイノベデイ お題「ロゼッタストーン」によせて)

転がる難題、広がる悩み

三軒隣の幼馴染は自分の事がかぐや姫だと思い込んでいる。

そして彼女は僕を求婚者に仕立て上げ、無理難題を突き付けるのが大好きだ。

今回のお題は、ロゼッタ・ストーン。

こんな難題を吹っかけられているのは、世界広しと言えど僕くらい……あれ？仲間が沢山？

(2011/9/14 ツイノベデイ お題「ロゼッタストーン」によせて)

悪いのはだあれ？

大学時代、古文書研究科で意気投合した親友と約束した。
将来子供が生まれたら『ヒエロ』『グリフ』って名付けようねって。
だけど私の息子は名前のせいで苛められている。皆に道化師扱いされるのだ。
ああ、あの石さえなければ！こんなことにはならなかったのに！

(2011/9/14 ツイノベデイ お題「ロゼッタストーン」によせて)

郵便不達

ロマンチストな恋人が、誕生日にエジプト旅行をプレゼントしてくれた。
砂漠の中に手紙を隠したと言う。
石に刻んだその手紙は、永遠に消え去らぬ愛の証だとか。

...きっと見つけても読めやしない。彼は字が下手だから。
これじゃあまるきり、ロゼッタ・ストーンだな。

(2011/9/14 ツイノベデイ お題「ロゼッタストーン」によせて)

召し上がれ甘味

なぞなぞが大好きな君と、謎解きが大好きな僕は、帰り道に新しいなぞなぞを出し合うのが習慣

。

「秋の紅葉と君の耳たぶ、共通点はな一んだ？」

「待って、今、何も考えらんない」

俯いて首を振る君が、苺味のリップクリームを使ってたんだね。

ずっと謎だった甘い香の正体、今解けたよ。

混じわる

真っ黒い靴の踵だけ真っ白。

真っ白いシャツのボタンだけ真っ黒。

ホワイトカラーに紛れる学生服。

喪服の群れに囲まれる白装束。

対極を身に纏うのは、強欲の片鱗かも知れないな。

眩いて笑う貴方の髪は、白と黒のアシンメトリー。

ショウソウ

栗色のショートボブや、ふわふわのパーマに憧れてないわけじゃない。
マスカラとアイラインで瞳を縁取る事も、してみたくないわけじゃない。
皆私を地味だと笑うけど、それは当然のことだ。
黒髪をきっちりと三編みにし、眼鏡をかけて、私は学生服の繭に隠れる。
羽化するにはまだ早い。

砂路の行方

海岸線を毎日歩く。
君に似合いの指輪を探して。

美しい貝殻も、
角の丸くなった硝子片も、
人魚の涙だって君には相応しくない。

何千年も海を旅し、
何百人の誓いを眺めた、
呪いの指輪を僕は探す。

君と永遠の指切りをするために。